

大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 7 1 集

長岡京跡右京第 1273-2 次調査
大山崎町第 81 次遺跡確認調査



2 0 2 5

大山崎町教育委員会

大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 7 1 集

長岡京跡右京第 1273-2 次調査
大山崎町第 81 次遺跡確認調査

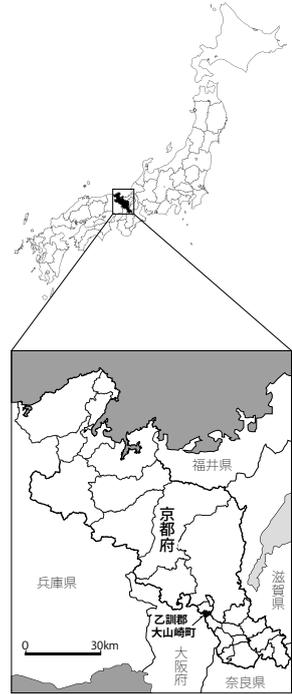


2 0 2 5

大山崎町教育委員会

例 言

1. 本書は、大山崎町教育委員会が令和5年度に実施した国庫補助による発掘調査の報告書である。
2. 座標系は、日本測地系の第VI座標系を主として用いた。これは、これまでの調査成果との整合性を重視したためである。ただし、世界測地系の座標を併記している。両測地系の座標値は、相互の変換作業は行わず、それぞれ実地に設置した既存点から実際に測量して求めた。
3. 調査回数については、以下の略号を用いた。
長岡京跡・宮域 (P)、左京域 (L)・右京域 (R)、山城国府跡 (K)・山崎津跡 (T)・山崎城 (YJ)。本書で調査回数の区分を表す場合は、上記の括弧内に示したアルファベットの略称を用いる場合がある。
4. 各調査回数に付された地区名については、高橋美久二 1977「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要 1977』)による小字名を基にしたアルファベット表記の地域区分に準じ、同一地区内における調査の回数は、アラビア数字を末尾に付して示している。
5. 地形区分については、「1:25,000 土地条件図京都南部」(国土地理院 1966年印刷)、「長岡京市域地形分類図」(『長岡京市史』資料編一付図2, 1991年)を参照した。
6. 本文中で表記した「西国街道」は特に断らない限り府道西京高槻線を指す。
7. 発掘調査及び整理作業では、以下の方々の参加・協力を得た(敬称略・五十音順)。
株式会社サポートスタッフ
調査整理員：天谷明子・坂林彩也・村上優美子
町立大山崎中学校職場体験実習生：鈴木美結・宮下紡・森田陽子
8. 本書の作成は、大山崎町教育委員会事務局 生涯学習課 文化芸術係が担当した。松崎俊郎・八木麻里の助言と協力を得て、編集・執筆は、菅生薫が担当した。
9. 表紙のカットは、大山崎町第81次遺跡確認調査出土の軒平瓦 報告番号1(縮尺4分の1)である。



目 次

1. 令和5年度における発掘調査 1
2. 長岡京跡右京第1273-2次(7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区)調査報告 1
3. 大山崎町第81次遺跡確認(7YYMS' SS-17地区)調査報告 8

1. 令和5年度における発掘調査

大山崎町教育委員会が令和5年度に実施した調査は3件である(表1)。このうち、国庫補助事業による調査が2件(表1、番号1・2)、開発等の工事に伴う原因者負担の調査が1件であった(表1、番号3)。本書では、このうち、前者の調査成果を収録する。

長岡京跡右京第1273-2次調査では、中世の農耕関連遺構とみられる正方位を指向した区画溝を検出した。また、白味才遺跡における大山崎瓦窯の範囲確認調査(大山崎町第81次遺跡確認調査)では、IK77次調査で検出したSX09の東張り出し部分と考えられる遺構を検出した。

2. 長岡京跡右京第1273-2次 (7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区) 調査報告

調査地 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字里ノ後26-1、26-6、27-1、28-1

調査期間 令和5年10月20日

調査面積 160㎡

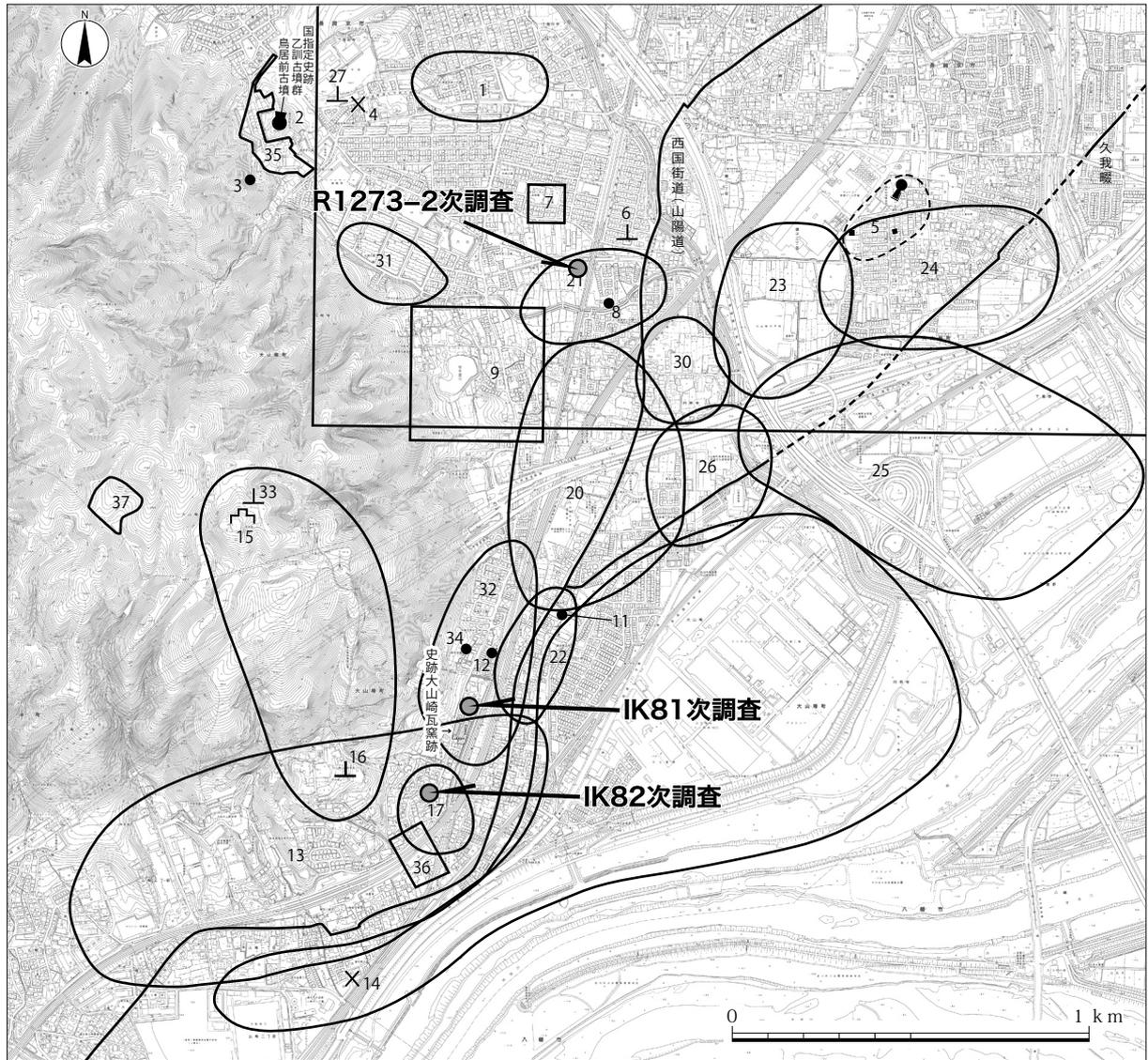
1. 位置と環境

当該地は、標高25.5m～27.7mの扇状地に立地する。調査地の南には久保川が東北東に流れ、桂川の支流である小泉川に注ぐ。長岡京の条坊復原によれば、長岡京跡右京九条二坊十七町・十八町にあたり、また、縄文時代～中世の久保川遺跡にも含まれている。周辺では、調査地の東側で実施されたR735・R786・R884次調査において、古代の庭園の洲浜と評価された「礫敷き遺構」が検出され、火付け木やヒノワ様の文様を記した墨書石が出土した。また、久保川の南側で行われたR873次調査では、奈良時代後半の土器21点に、「大宅」、「麻呂」、「大」、「宅」、「富」といった墨書が確認された。こうした調査成果からは、当地を一定の社会的階層に属する識字層が占地していた状況が見てとれる。令和4年度に実施したR1273次調査においては、前述の礫敷き遺構に類似する中世の整地遺構を検出したほか、奈良時代の遺物包含層から鳥鈕蓋が出土した。鳥鈕蓋は奈良時代後半～平安時代前期にかけて愛知県猿投窯跡群で生産された灰釉陶器(または原始灰釉陶器)であり、類例が平城京、平安京、美濃国分寺、尾張国分寺等で出土している特徴的な遺物である。奈良時代の久保川遺跡の性格を知るうえで重要な成果といえよう。

また、当地の西には円明寺が位置している。円明寺は11世紀中頃には存在していたと考えられており、13世紀前半には西園寺公経による円明寺山荘の経営が始まった。こうした荘園開発に関すると考えられる遺構は散在的に検出されているが、その全体像は不明な点が多い。

表 1 令和 5 年度発掘調査一覧

番号	調査 回数	地区名	調査地	調査 機関	調査 面積	原因者	調査 期間	所収
1	長岡京跡右京 第 1273-2 次調査	7ANSSR-10・ SSZ-9 地区	大山崎町字門明寺小字 里ノ後 26-1、26-6、 27-1、28-1	大山崎町 教育委員会	160 m ²	詳細分布調査	231020	本報告書
2	第 81 次 遺跡確認調査	7YYMS' SS-17 地区	大山崎町字大山崎小字 白味才 39-3	大山崎町 教育委員会	53 m ²	範囲確認調査 (国庫補助事業)	240124 ～ 240325	本報告書
3	第 82 次 遺跡確認調査	7YYMS' BD-3 地区	大山崎町字大山崎小字 琵琶谷 7	大山崎町 教育委員会	104 m ²	宅地造成に伴う発掘 調査	240322 ～ 240419	大山崎町 第 72 集



遺跡名

1 脇山遺跡	9 円明寺跡	14 山崎橋跡	22 堀尻遺跡	32 白味才遺跡
2 鳥居前古墳	11 傍示の木古墳	15 山崎城跡	23 松田遺跡	33 古城遺跡
3 小倉古墳	12 白味才古墳	16 銭原遺跡	24 宮脇遺跡	34 白味才西古墳
4 石倉集石遺跡	13 大山崎遺跡群	17 山崎遺跡	25 下植野南遺跡	35 鳥居前西遺跡
5 境野古墳群	河陽離宮跡	18 長岡京跡	26 算用田遺跡	36 山崎廃寺(山崎院跡)
6 葛原親王塚遺跡	相応寺跡	19 山崎津跡	27 鳥居前遺跡	37 椎尾遺跡(慈悲尾山寺跡)
7 葛原親王屋敷跡遺跡	山城国府跡	20 百々遺跡	30 金藏遺跡	
8 里の後古墳	山崎駅跡	21 久保川遺跡	31 西法寺遺跡	

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』〔第3版〕に準じたため欠番が存在する。

第 1 図 大山崎町遺跡地図と令和 5 年度に実施した調査地 1 : 20,000

2. 調査経過

本調査は宅地造成に伴う擁壁工事に伴い遺構面が露出したため、緊急的に詳細分布調査として遺構平面の記録調査を実施した。調査は令和5年10月20日に実施した。

3. 基本層序

本調査地の基本層序は次の通りである。

第1層は、暗灰色壤土であり、現在の田畑地表面を形成する層である。

第2層は、橙褐色粘質土であり、現在の田畑に対応する床土層である。

第3層は、灰褐色粘質土であり、旧耕土層である。

第4層は、黄褐色粘質土であり、旧耕土層に対応する旧床土層である。

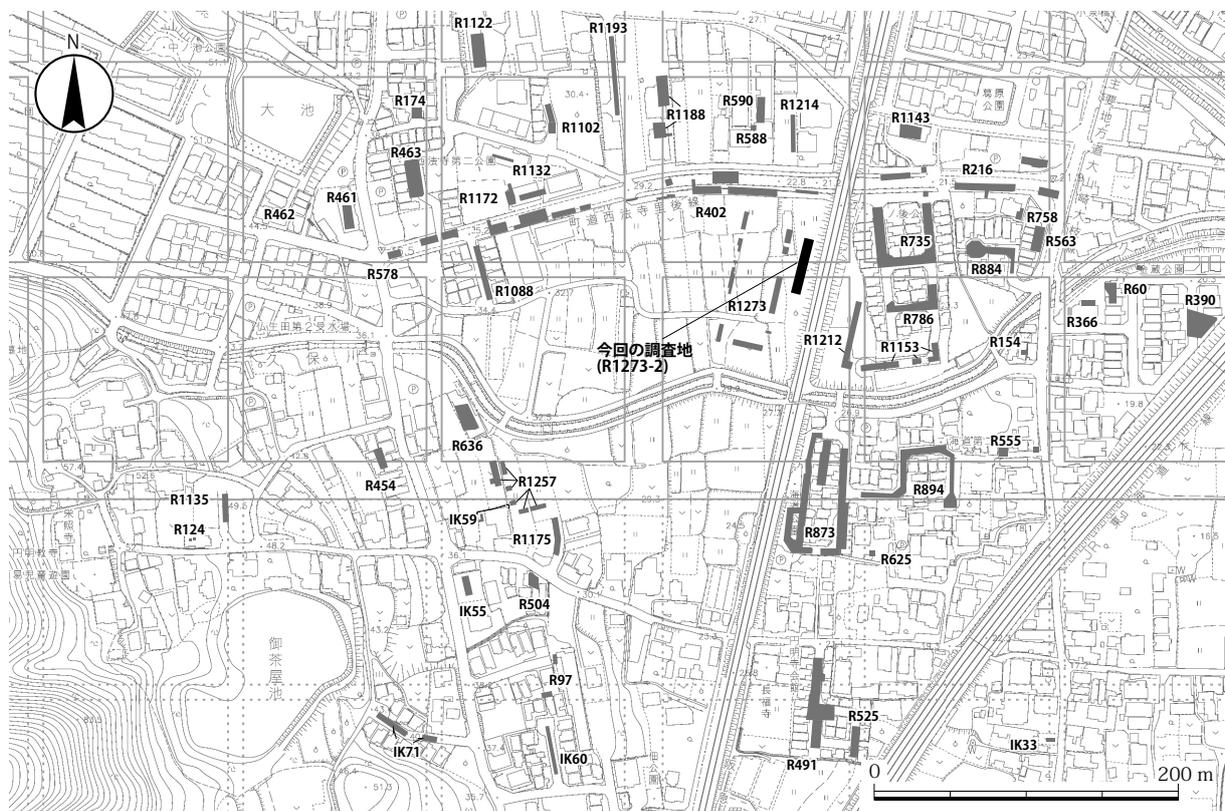
第5層は、灰褐色砂質土である。

第6層は、褐色砂質土である。

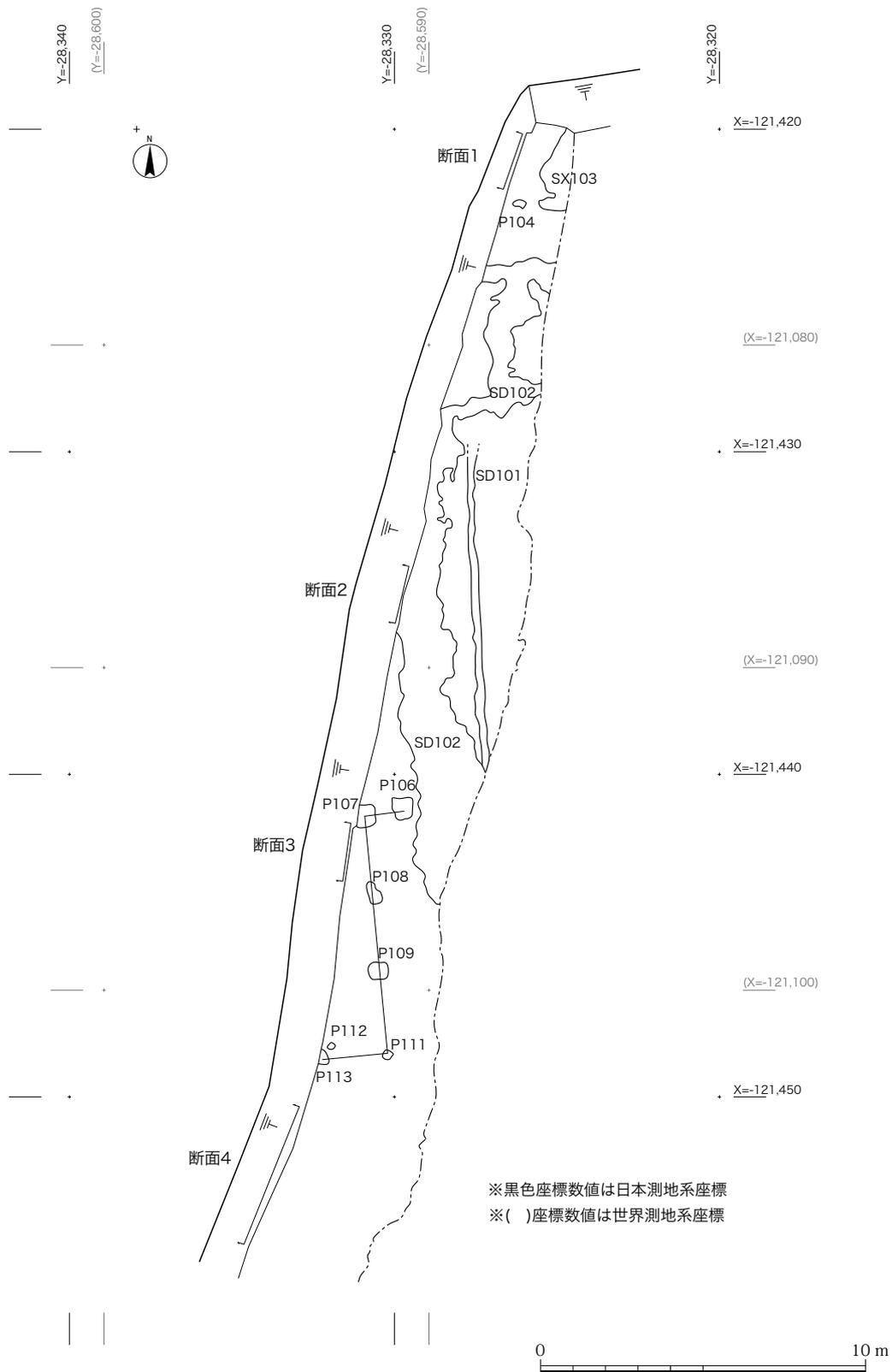
第7層は、暗灰褐色粘質土である。

第8層は、黄褐色粘性砂礫であり、当該地の地盤を形成する堆積層である。

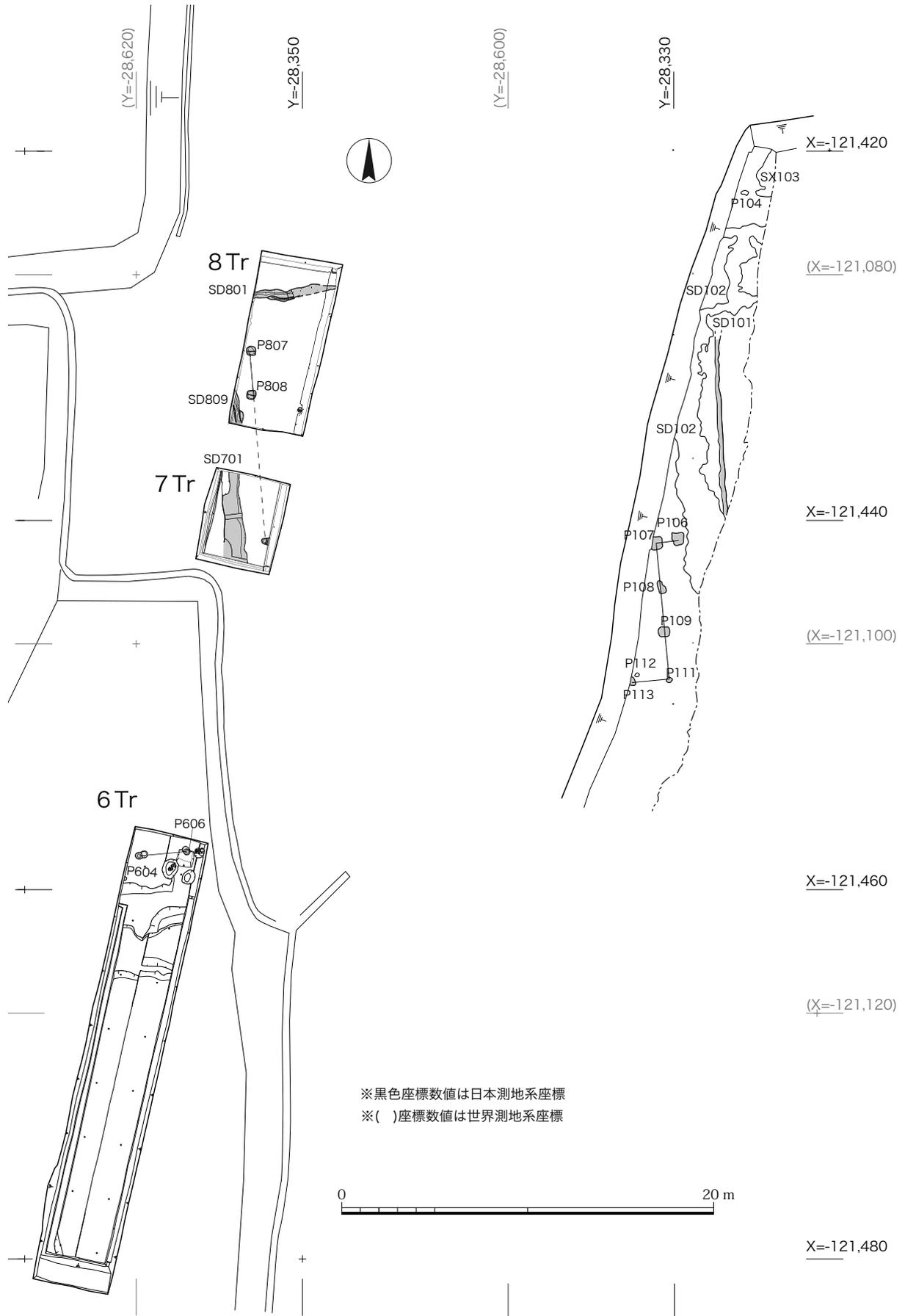
遺構は、第8層上面で検出した。



第2図 周辺の調査と調査位置図 1:5,000

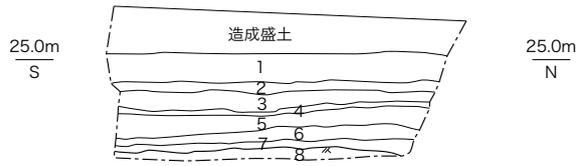


第 3 図 調査区全体図 1 : 200



第4図 R1273次調査との位置関係 1:300

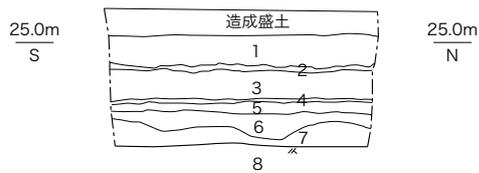
断面1



断面2

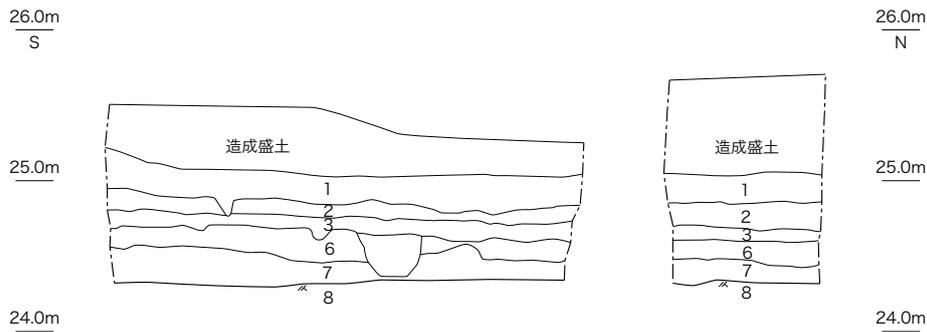


断面3



- 1 灰色壤土(耕土)
- 2 橙色粘質土(φ1mm以下の砂粒を多く含む)(床土)
- 3 灰褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む。マンガン粒を多く含む)(旧耕土)
- 4 黄褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む。土師器小片をわずかに含む)(旧床土)
- 5 灰褐色砂質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む)
- 6 褐色砂質土(φ0.5mm以下の砂粒を多く含む。土師器片を少量含む)
- 7 暗褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む、φ20mm以下の砂粒を多く含む)
- 8 黄褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む)(地盤層)
- SD102 暗灰褐色粘質土(φ20mm以下の円礫を少量含む。φ1mm以下の砂粒を多く含む。炭片・土師器片を少量含む)

断面4



第5図 断面図 1:50

4. 検出遺構

溝 SD101 第8層上面検出した直線の溝である。SD102 に先行し、北側では底面が高くなり途切れるため遺構が後世に削平されたと考える。溝の走向はN 11° 24' 00"Wである。

溝 SD102 第8層上面で検出した溝である。南北溝と東西溝がT字状に交差する。溝埋土の掘削ができなかったため、遺物による遺構の年代決定はできない。溝の南北部分の走向はN 14° 36' 18" Wである。

不明土坑 SX103 調査区北端で検出した不整形の土坑である。

ピット P104 調査区北端で検出したピットである。

柱穴 P106~109・P111・P113 第8層上面で検出した柱穴である。南北方向の柱筋の中軸は溝 SD102 と並行している。柱穴の心々間隔は、P106 と P107 は 1.17m、P107～P109、P111 は 2.38～2.58m、P111 と P113 は 2.04m である。埋土から土師器と製塩土器の細片が出土した。

5. 出土遺物

本調査では、須恵器、製塩土器、瓦器が出土したが、細片であり極めて少量であったため、図化できずものはなかった。

6. まとめ

今回の調査は R1273 次調査の調査区に近接し、当該トレンチにおいては中世の遺構を検出しているため、両調査での成果を比較し、まとめにかきたい。

R1273 次調査では5つのトレンチにおいて中世と考えられる井戸や柱穴、礫が主体の整地遺構を検出し、中世には農耕関連遺構が当地に広がっていたと考えた（菅生薫 2024）。このうち、特に6・7・8トレンチが今回の調査地に近接しており、それらのトレンチで検出した遺構と本調査で検出した遺構を以下で比較したい。なお、遺構名が600番台、700番台、800番台の遺構はそれぞれR1273次調査の6・7・8トレンチで検出した遺構、100番台の遺構は今回の調査で検出した遺構である。

まず、今回の調査でもR1273次調査でも地盤層上面で遺構を検出している。標高は今回の調査が24.2m、R1273の7トレンチが25mで地盤層上面を検出しており、東に1°9'33"傾斜している。

次に遺構の配置であるが、P106とP107が成すラインとP111とP113が成すライン、P604とP606の中軸ラインの走向が一致する。また、P107からP111の柱穴が成すラインは、SD101、SD701、P807とP808が成すライン、SD809の走向と一致し、SD801はこれと90°の角度をなす。

柱間については、P604とP606の心々間隔は2.6mであり、P807とP808心々間隔は2.38mである。今回の調査で検出した柱穴の心々間隔とも近似するまた、R1273次の7トレンチで検出した土坑は

先述の P807・P808 と柱筋が揃う。両者の心々間隔は 8.02 m であり、概ね柱間 3 間分の距離を有する。

遺構の平面形については、P106、P107、P109、P113 は隅丸方形を呈する。R1273 次の 7・8 トレンチで検出した土坑も隅丸方形であり、両者の関連を示唆する。一方で R1273 次の 6 トレンチで検出した P604 と P606 は円形であり、掘削された契機が異なる可能性がある。

これらのことから、R1273 次の 7・8 トレンチで検出した柱穴と本調査で検出した柱穴は方位や柱間、遺構の形状等が類似していることが指摘できる。調査範囲が限られるため断定はできないが、一連のものとして構築された可能性がある。R1273 次の 6 トレンチで検出された柱穴も関連する遺構である可能性があるが、相違点もみられた。これらの柱穴群の柱間が 2.3～2.5m と広いことや建物状に柱穴が連続しないことに鑑みると、柵列であったと考える方が自然かもしれない。R1273 次の 7・8 トレンチで検出された SD701・SD809 については現代の田畝に伴う溝である可能性が指摘されているが、今回の成果は中世の遺構の方位が現代の地割りをある程度規定している可能性を示唆した。

なお、R1273 次調査で検出した「礫が主体の整地遺構」を今回の調査地の南側で確認した。遺構の残存状況が悪く図化できなかつたが、壁面でも地盤層上面に整地遺構が観察できた。R1273 次調査と R735 次調査の間をつなぐ成果といえよう。

以上のことから、中世の久保川遺跡においては柵や溝で土地を区画するような土地利用のあり方が伺えた。当地の西側には中世円明寺の推定地があり、13 世紀には西園寺公経による荘園経営が始められたと考えられている。これらの調査で検出された遺構がそうした荘園開発の痕跡として捉えられるのか、今後の調査に期待したい。

[参考文献]

- 古閑正浩 2006 「長岡京跡右京第 735 次 (7 ANSSR- 4 地区) 発掘調査報告・長岡京跡右京第 786 次 (7 ANSSR- 6 地区) 発掘調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 33 集 大山崎町教育委員会
- 菅生薫 2024 「長岡京跡右京第 1273 次 (7 ANSSR-10 地区・7 ANSSZ-9 地区) 発掘調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 70 集 大山崎町教育委員会

2. 大山崎町第 81 次遺跡確認調査 (7YYMS' SS-17 地区) 報告

調査地 京都府乙訓郡大山崎町字大山崎小字白味才 39-3

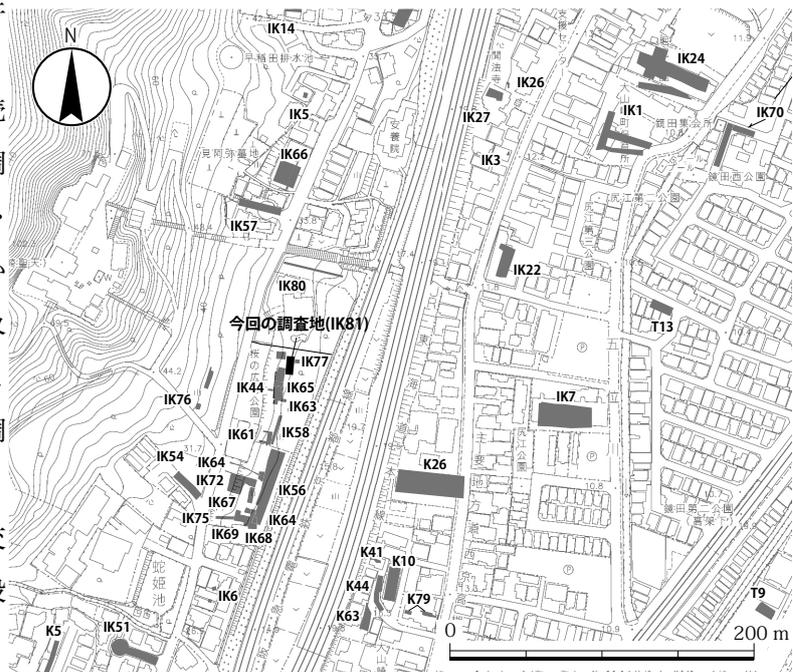
調査期間 令和 6 年 1 月 24 日～令和 6 年 3 月 25 日

調査面積 53 m²

1. 位置と環境

当該地は、標高 27m～29m の天王山山麓に位置している。南側には国史跡大山崎瓦窯跡が立地しており、規格性の高い 10 基の瓦窯が整然と並ぶ状況が検出されている。検出された窯は焚口を南側にもつ 1・9～12 号窯（B 群瓦窯）と焚口を東側にもつ 2～6 号窯（A 群瓦窯）の 5 基ずつに分類することができる。両群を構成する窯の中軸の心々間隔は平均 5.9m である。A 群・B 群の焼成室側には、窯と約 4.5m の距離をもって窯と平行に排水溝が通っている。この 2 つの窯群と 2 条の排水溝はそれぞれ 94°の角度で構成され、排水溝は交点で交わり東流する。2 条の排水溝で囲まれる区域に瓦廃棄土坑が検出されているため、この区域が焼成品の仕分け場所となっていたことがうかがえる。つまり、窯と排水溝をほぼ直角に配置することで運搬動線の短縮と排水施設の共有を計っていることが分かる。焚口前面には船底状の遺構があり、焼成後の灰などをかき出すための施設だったと考えられる。同じく焚口前面には柱穴が検出され、焚口前面を覆う掘立柱建物の存在が示唆される。また、焚口側の構造が発掘調査により明らかとなっている A 群では、5 基の窯をさらに 2 基・2 基・1 基の支群に分けるように、窯と窯の間に舌状の張り出しが検出された。一方、史跡指定地の北側、つまり今回の調査地付近では 7 号窯・8 号窯と瓦廃棄土坑からなる C 群瓦窯が検出されている。C 群瓦窯では A 群で検出された船底状遺構と掘立柱建物が検出されている。C 群瓦窯の焚口ラインは A 群瓦窯の焚口ラインとほぼ一致する。最も南に位置する 7 号窯の中軸は、A 群瓦窯の 6 号窯の中軸から 48 m の距離があり、これは、A 群の両端の瓦窯の心々間距離を 2 倍した距離に相当する。これらのことから、C 群瓦窯も A・B 群瓦窯と一体的な計画性のもとで構築されたことがうかがえる。当該地の西側には約 5.5m の崖があり、近年行った測量調査成果によると、この崖面が大山崎瓦窯の操業時の地形をある程度残している可能性があることが分かった。

今回の調査区は天王山山麓から続く山裾の緩斜面であり、IK77 次調査で検出された瓦廃棄土坑 SX01・09 の東側に当たる。この SX01 から溝状に伸びる SX09 の延長部分及びその付属施設の有無を確認することを主目的として調査を行った。調査にあたり、2～8 号窯の焚口ラインと 8 号窯の焚口中軸ラインの交点を起点に 5m 間隔でグリッドを設定し、トレンチを設定した。



第2図 周辺の調査と調査位置図 1:5,000

2. 調査経過

本調査は遺跡の範囲確認調査として、令和 6 年 1 月 24 日～3 月 25 日に実施した。

3. 基本層序

基本層序は、隣接地で実施された IK77 次調査に準じ、1～4 層に区分した。ただし、IK77 次調査の第 4・5 層はいずれも地盤層の区分であることから、本調査では 4a・4b 層とした。第 1 層は暗灰色壤土で表土である。第 2 層は暗褐色シルトで、含有物の違いにより 2a・2b・2c 層に区分した。2b 層上面で遺構面を検出した。第 3 層は黄褐色粘質土である。第 4 層は礫を多く含む黄褐色系の粘質土で、当該地の地盤を形成する堆積層である。含有物及びしまりの違いにより 4a 層と 4b 層に区分した。第 4a・4b 層上面で遺構面を検出した。

4. 検出遺構

(1) 近世の遺構

溝 SD03 幅 0.5m、深さ 0.2m を測る東西溝である。溝の走向は N 71° 11' 42"W である。

溝 SD12 幅 0.7m、深さ 0.2m を測る東西溝である。溝の走向は N 71° 27' 43"W である。SD03 と平行であり、当地が近代に茶園であったことから、農園用の排水溝や区画溝であった可能性がある。

不明土坑 SX06 長軸 1.1m、深さ 0.3m の土坑である。

不明土坑 SX07 長軸方向の長さ 0.9m、短軸方向の長さ 0.5m、深さ 0.2m を測る土坑である。位置、検出高及び埋土の類似性から、IK77 次調査で検出した SX07 と同一遺構と考えられる。IK77 次調査では古代の遺構と報告されているが、堆積状況から近世の遺構といえる。

ピット P08 径 0.2 m、深さ 0.2m を測るピットである。

(2) 古代の遺構

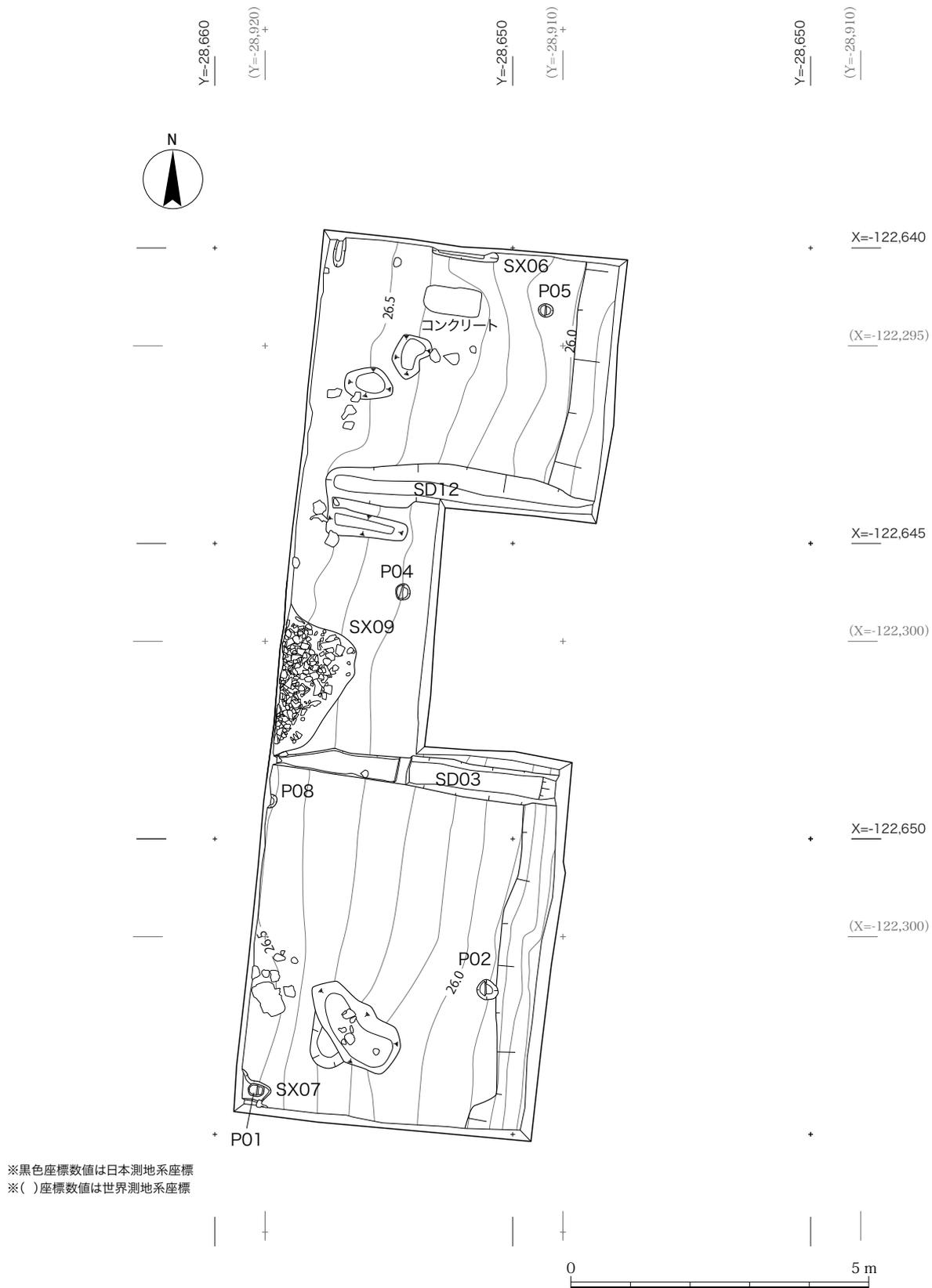
ピット P01 直径 0.2m、深さ 0.08m を測るピットである。SX07 の埋土下、底面で検出した。

ピット P02 径 0.3 m、深さ 0.2m を測る。

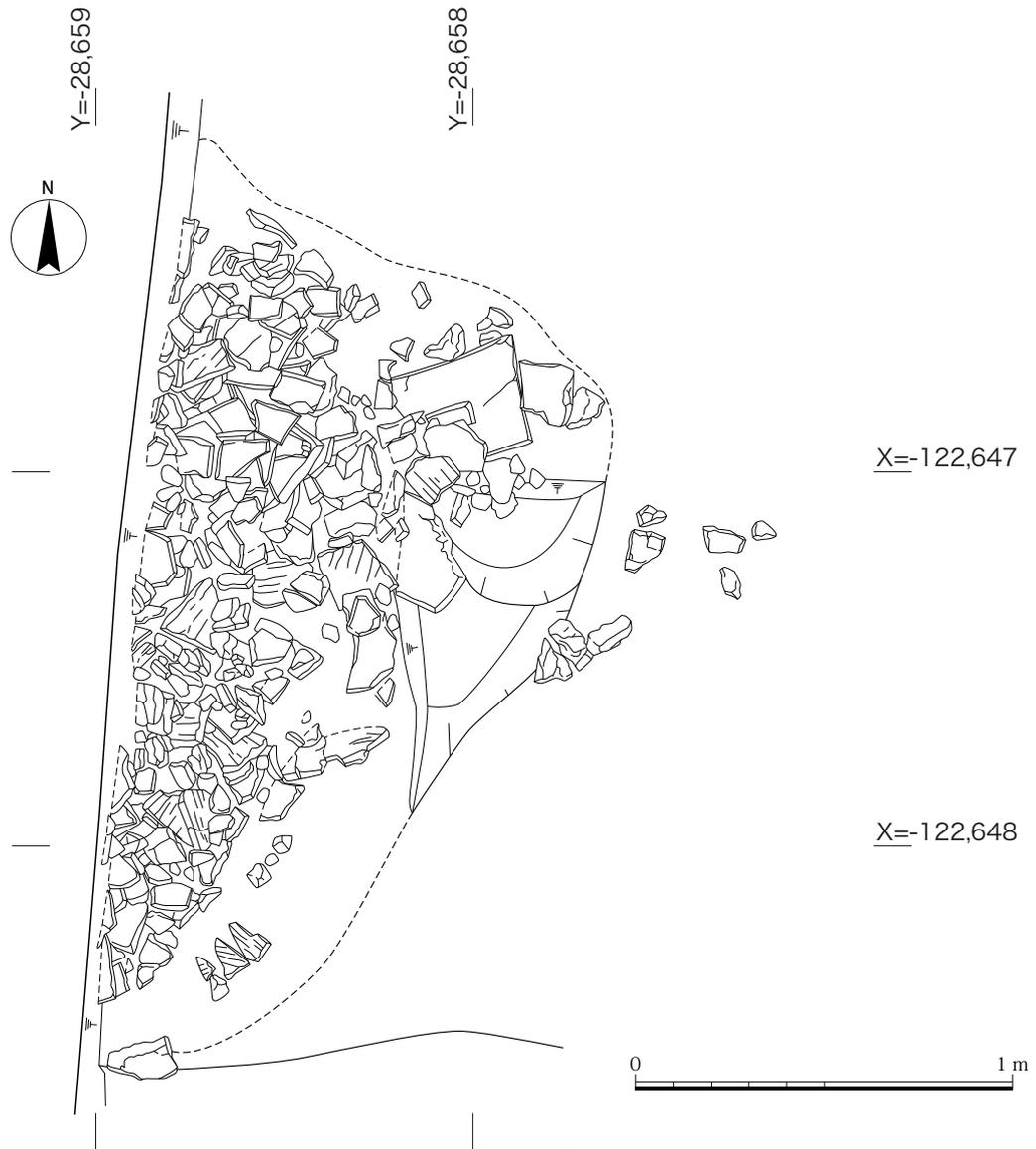
ピット P04 径 0.2 m、深さ 0.2m を測る。

ピット P05 径 0.2 m、深さ 0.1m を測る。

土坑 SX09 検出幅 2.5m、検出長 1.2m、東端部分の深さ 0.1m を測る瓦廃棄土坑である。位置及び瓦廃棄状況の類似性から、IK77 次調査で検出した SX09 と同一遺構と考えられる。ただし、IK77 次調査では SX09 の埋土に炭化物や焼土が含まれていた旨が報告されているが、今回検出した部分の埋土には含まれない。SX09 は SX01 と接続する不整形の溝状遺構で、東側の先端部分を一部掘削して遺構の東端部を確認した (註 1)。



第 6 図 調査区全体図 1:100



第 7 図 SX09 遺構平面図 1:20

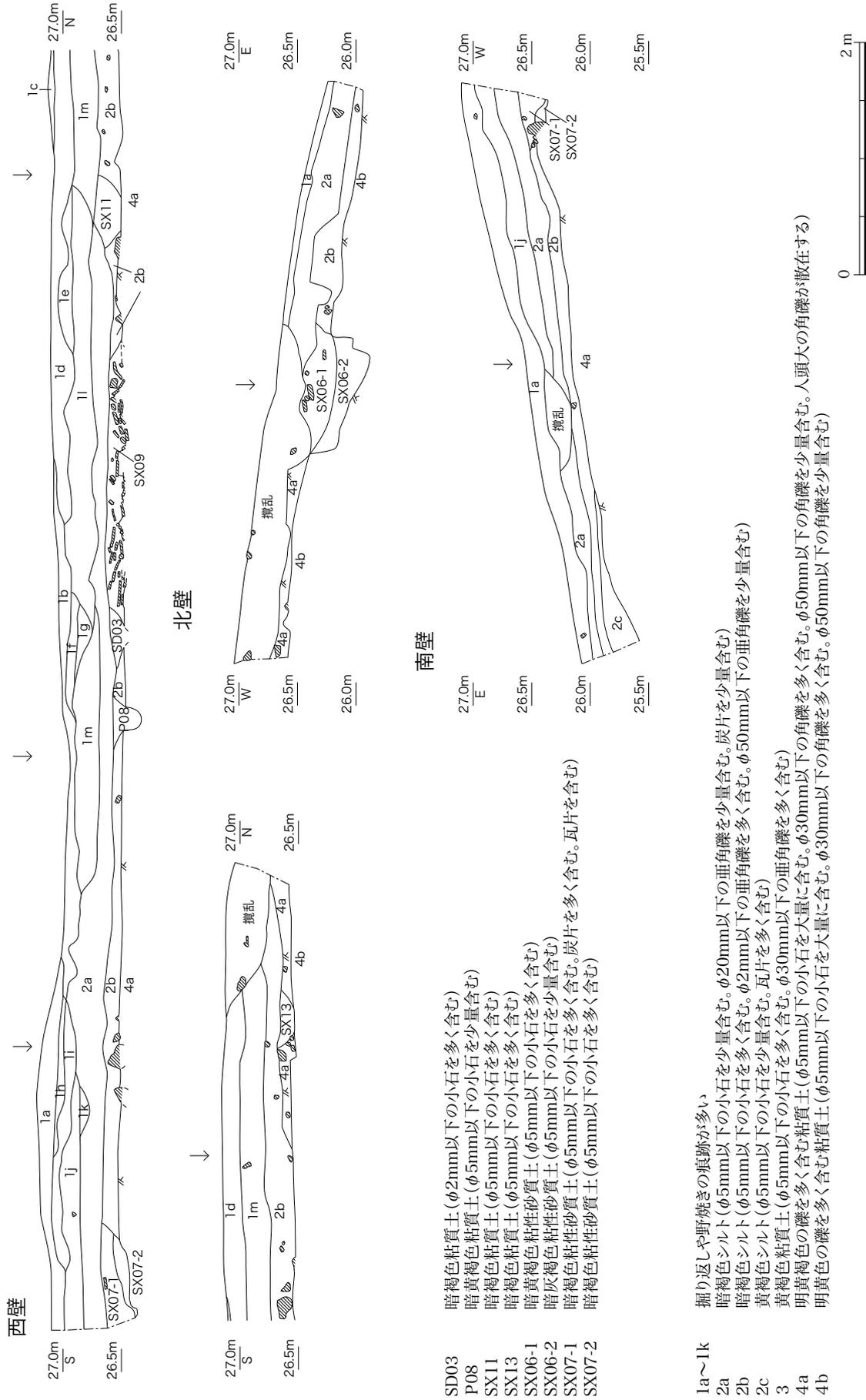
5. 出土遺物

本調査で出土した遺物に報告する。なお、年代観について、平安時代以降の土師器については平尾政幸 2019 を参考にした。

(1) 平安時代の出土遺物 (第 10 図～ 11 図 1～10)

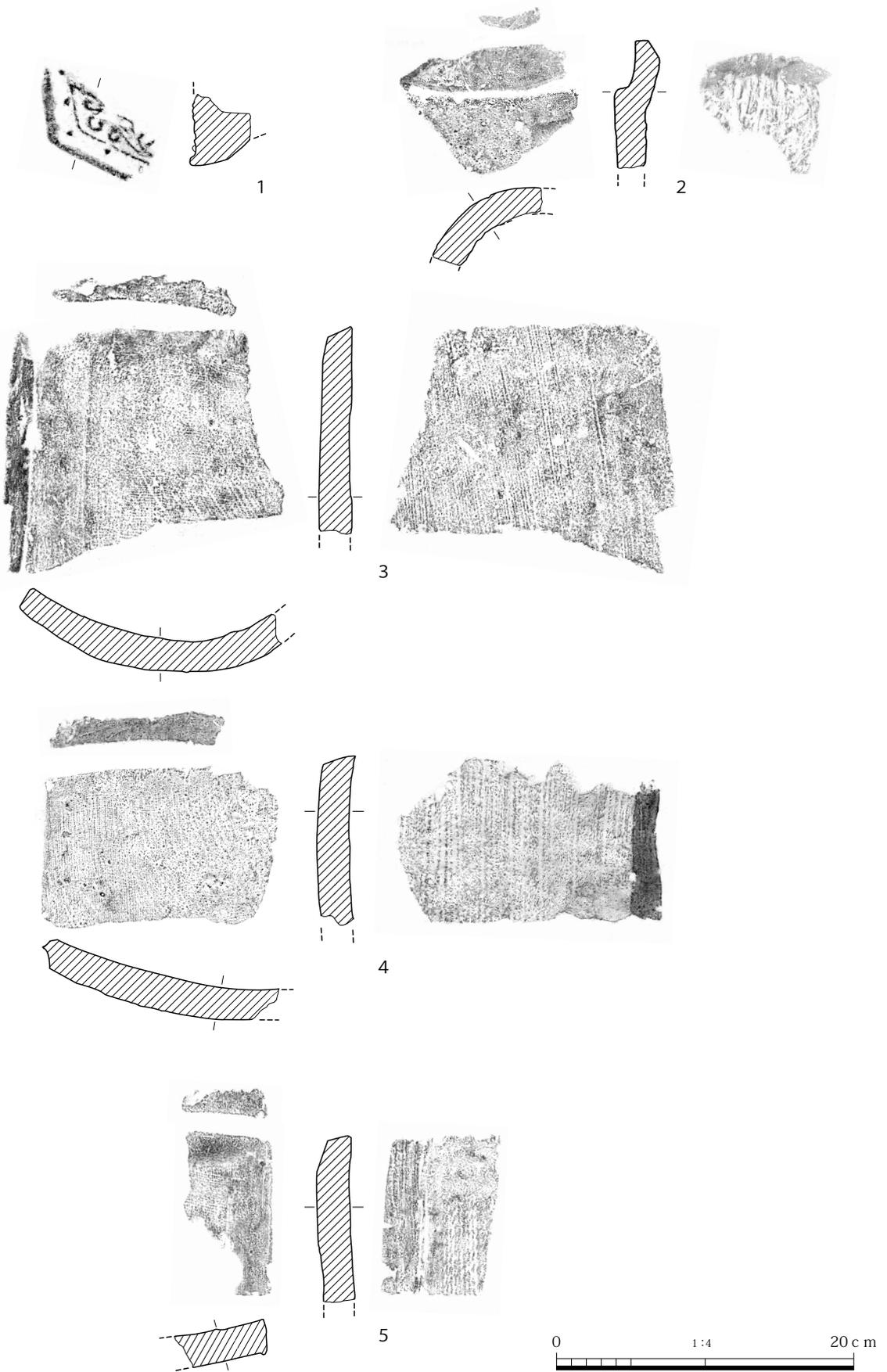
1 は均整唐草文軒平瓦である。左脇区及び左第 1 単位のみ的小片であるが、同窠を確認するに当たり次の点において文様に特徴がある。

1. 葺手の部分が円形ではなく楕円形～逆「つ」字状である点。
2. 下外区左端の珠文が左脇区下端の珠文と離れている点。
3. 左第 1 単位の外側に子葉が 1 枚表現される点。

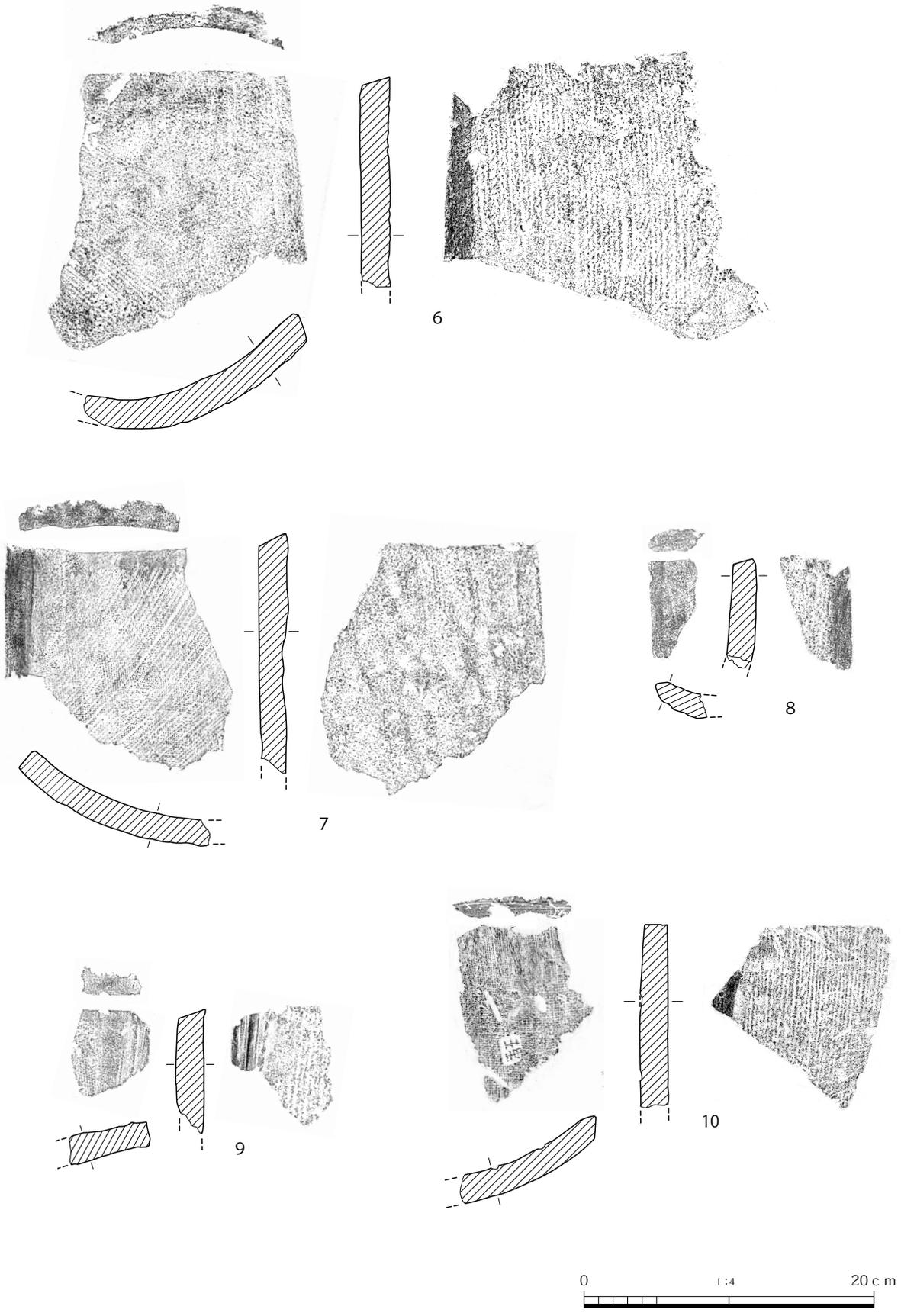


第 8 図 遺構断面図 1 : 50





第10図 遺物実測図(1) 1:4



第 11 図 遺物実測図 (2) 1:4



第 12 図 報告番号 1、NS209、7757 C の比較

4. 第 1 子葉の蕨手の中心を通る下外区界線の垂線上に下外区左端の珠文が位置する点。

これらの特徴を元に同範例を確認すると、大山崎瓦窯出土軒平瓦には同範品はない。また、平城京以前の宮都の出土瓦にも同範例がない。長岡宮式軒瓦 7757C 型式、西賀茂瓦窯出土の NS209 と酷似する。本例と 7757C は計測値ではほぼ一致しているが、一致する範傷はなく、唐草文先端の巻き込みが本例の方がやや緩い。また、上向きに巻き込む蕨手の形状が、本例の方がひらがなの逆「つ」字状であり、扁平であることが相違点としてあげられる。さらに、界線の弧も本例の方が直線的であるため、同範とはみなせない（註 2）。NS209 は蕨手が楕円形～逆「つ」字状を呈しており、両者を判別するのが困難であるほど酷似しているが、唐草の巻き込み方に若干の差異があるようにも思われ、本出土例のみをもって同範の認定をするのは困難である（第 12 図）。ここでは NS209 型式を最有力の類例と位置づけ、大山崎瓦窯で成立した独自型式である可能性もあると指摘するにとどめたい。いずれにしても、大山崎瓦窯では初の出土例である。排土からの出土であり、評価は慎重にならざるを得ないが、古閑 2022 によれば NS209 型式は長岡宮式軒瓦 7757D の系譜を引く型式であり、NS204 を経て NS209 に至り、大山崎瓦窯 OY202 に影響を与えたとされる。この系譜に鑑みると、本例は OY202 の系譜を考えるうえで有力な出土例といえる。NS209 と同範であれば、範が西賀茂瓦窯から移動し、瓦窯内で OY202 に直接的影響を与えたということができ、新形式であれば NS209 と OY202 をつなぐ型式ということができよう。

2 は丸瓦の玉縁部である。

3～9 は平瓦である。大山崎瓦窯産で、糸切り痕が明瞭に残る。凸面はタタキ技法である。

10 は「理」の刻印がある平瓦である。大山崎瓦窯ではこれまでも A 群瓦窯において「理」の刻印がある瓦が 4 種出土している（古閑正浩 2022）。本例は、「里」の右上が刻印の界線と一部接するもの（古閑 2022 の報告番号 256）と同じ原体であり、平城宮 g 種とも同じである（第 13 図）。同報告によれば、大山崎瓦窯出土の「理」刻印瓦は平城宮所用瓦の再利用品であるとのことであり、本例もそうした脈絡の中で位置づけられよう。

(2) 近世の出土遺物 (第 14 図 11 ~ 17)

11 は土師器皿である。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたと考えられる。室町時代後期～末期に位置づけられる。

12 は桔梗文軒丸瓦である。5 枚の花弁全ての弁端を、弁のふくらみを抑制するようにユビオサエしている。IK77 次調査で検出された近世の石段を西側に延長すると現在の観音寺裏手の門に行き着くことを踏まえると、調査地が観音寺の参道の一部となっており、その関係で当地から出土したと考えられる。なお、現在の観音寺に葺かれている桔梗文の軒丸瓦の花弁は多くが凹型である。本出土例の調整は、もともと凸型だった弁端を凹型にするための対応だった可能性がある。なお、角早季子 2018 でも本例と同文の軒丸瓦を報告しており「桐の花の文」とされているが、正しくは桔梗文であるのでここで訂正したい。

13・14 は近世の平瓦である。

15 は切羽である。

16・17 は元禄 10 (1697) 年以降の寛永通寶である。

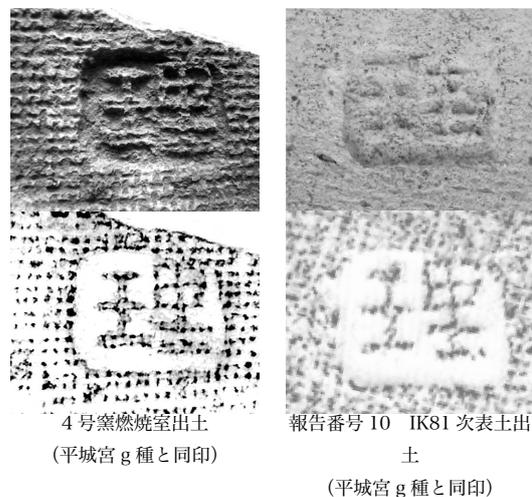
6. まとめ

今回の調査では IK77 次調査で検出された SX09 の東側延長部を検出した。IK77 次調査で検出した SX09 北断割では底部の標高は 26.6m であったが、今回検出した東端の底部は 26.2m であり、東側に向けてゆるやかに傾斜していることが判明した。現状、遺構掘方の形状からは北西側へとさらに広がる可能性がある。本遺構が焼成品の選別のために掘削された廃棄用の土坑であるのか、それとも SX01 に付属する排水施設として捉えるべきなのかは今回の調査では判断できなかった。

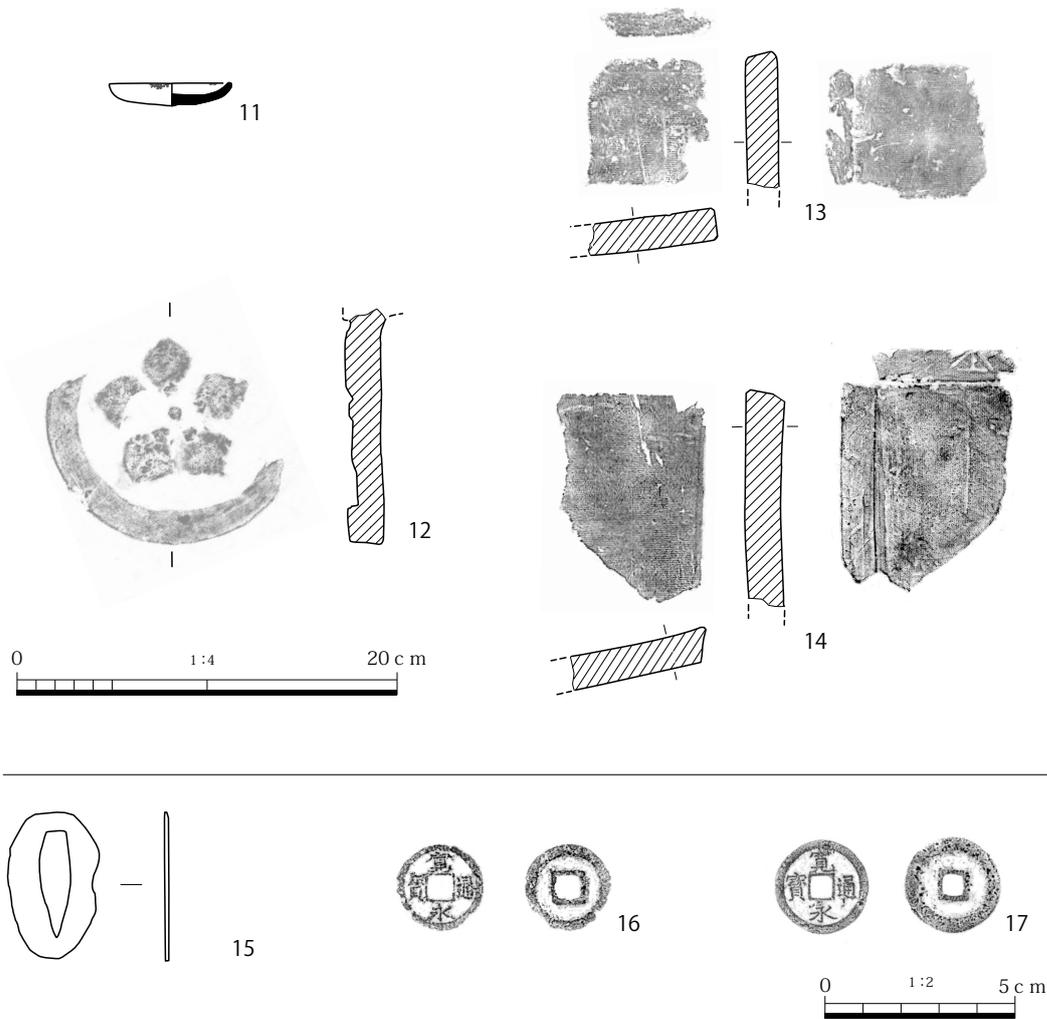
また、報告番号 1 の軒平瓦は大山崎瓦窯における初めての出土例である。長岡宮式 7757C や西賀茂瓦窯 NS209 と類似しており、操業の初期に生産されたものと位置づけられよう。一方、NS209 から影響を受けた OY202 は大山崎瓦窯の独自範であり、現在は A 群からしか出土していない。今後の調査成果により A 群～C 群の操業期間や文様系譜が詳らかになり、大山崎瓦窯の操業体制や瓦窯変遷の研究がますます進展することを願う (註 3)。

(註)

- (1) SX09 は IK77 次調査において埋土の断割を行っているため、今回の調査では遺構保存の観点から東端部分の掘削のみ行った。掘削部分には崩落防止のための土のうを



第 13 図 「理」銘刻印平瓦 (凹面) 原寸



第 14 図 遺物実測図 (3) 1:4 (15~17は1:2)

入れたうえで遺構全体を土のうで保護して埋め戻した。

(2)公益財団法人向日市埋蔵文化財センターのご厚意により企画展示中だった 7757C を本出土例と比較させていただいた。

記して感謝申し上げます。

(3)平安時代前期の平安宮所用瓦生産瓦窯の変遷史をはじめ、今回出土した大山崎瓦窯としては新形式となる軒平瓦の類例と長岡宮式軒瓦から続く文様系譜についてや、「理」銘刻印瓦の意義など、大山崎瓦窯のもつ歴史的・資料的価値について、京都府教育委員会文化財保護課記念物係の古閑正浩氏からは大変多くのことをご教授いただいた。また、IK81 次調査に際しては現場まで足をお運びいただき、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

[参考文献]

古閑正浩 2022 『史跡大山崎瓦窯跡』大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第 33 集 大山崎町教育委員会。

角早季子 2018 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 53 集 大山崎町教育委員会。

奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告VII』。

平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第 12 号 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所。

表2 大山崎瓦窯出土刻印瓦一覧表

瓦窯	地区別	出土遺物					備考
		〇印	「三川」	「十印」	「理」	他	
6号窯	狭口付近		1				
	1-1区西			1			
	1-1区東						
	1-2区西		2				
	1-2区東						
	小計	1	3	1	0	0	
6-5号窯	2-2区西		2	1		1	〇に十印
	2-2区東						
	小計	0	2	1	0	1	
5号窯	焼窯室内 前庭部N S sec北	2	1				
	3-1区東						
	3-1区西	2	7	1		1	〇印
	3-2区東		4				
	3-2区西	3	2			1	凹面にV線刻
	小計	7	14	1	0	2	
4号窯	焼窯室内 前庭部N S sec北	1					
	焼窯室内南半	1					
	焼窯室内4区新sec2			1	1	1	■印
	前庭部N S sec北		1	1			
	前庭部4区新sec1	2			1		
	前庭部4区新sec2	2					
	小計	8	1	3	3	1	
3-4号窯	4-2区西						
	4-2区東						
小計	0	0	0	0	0		
3号窯	焼窯室内 狭口sec上層(炭層以上)	3					
	5-1区東	1					
	5-1区西						
	5-2区東	(1)					軒丸裏面に〇
	5-2区西						
	小計	4	0	0	0	0	
2号窯	焼窯室内	1					
	6-1区東						
	6-1区西						
	小計	2	0	0	0	0	
1号窯	焼窯室内アゼ東					1	十印
	小計	0	0	0	0	1	
溝SD05	S D 05 東区	3				1	玉縁凸面刻印(〇に十)
	S D 05 西区	1					
	S D 05sec	1					
	小計	5	0	0	0	1	
窯以外	S K 30		1				
	S K 32				1		
	A区4層・5層					1	〇にキ印
	B区北部瓦溜まり		1				
	不明	1	1				
小計	1	3	0	1	1		
11号窯	焼成室 (IK75次調査)		1				
	小計	0	0	0	1	0	
C群	SX07					1	
	SX09					1	
表土							
小計	0	0	0	1	0		
合計	28	24	6	4	7		

表3 出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量 cm			色調		胎土	調整		焼成	残存度	備考	
					長さ	幅	厚さ	内外	断面		内面	外面				
1	5	排土	瓦	軒平瓦	-	-	(4.8)	瓦当:黄灰 2.5Y5/1	灰黄 2.5 Y 7/2	密 2mm 以下の灰 1mm 以下の石灰	-	-	硬	破片	均整唐草文	
2	14	1A区 2a層	瓦	丸瓦	(8.8)	(9.0)	2.0	凹面:褐灰 10YR4/1 凸面:褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR6/2	密 2mm 以下の白、灰、褐色	凹面:タタキ、布紋り痕	凸面:ナデ、ケズリ	硬	破片		
3	6	1C区 2a層	瓦	平瓦	(13.9)	(16.0)	2.2	凹面:灰 5Y5/1 凸面:灰 7.5Y6/1	灰 5Y5/1	密 5mm 以下の白色粒 5mm 以下の白	凹面:ケズリ、布目痕	凸面:縄タタキ、縄目痕、指頭圧痕	硬	破片		
4	8	1C区 2a層	瓦	平瓦	(11.0)	(15.7)	2.1	黄灰 2.5Y4/1	褐灰 10YR6/1	密 1mm 以下の白、灰、雲、2mm 程度の濃灰混じる	凹面:布目痕	凸面:縄タタキ、縄目痕、ハナレズナ付着	硬	破片		
5	3	1C区 2a層	瓦	平瓦	(10.9)	(6.0)	2.1	凹面:黄灰 2.5Y5/1 凸面:灰 N4/0	黄灰 2.5Y5/1	密 3mm 以下の黒色粒 1mm 以下の白	凹面:ケズリ、布目痕	凸面:縄タタキ、縄目痕、指頭圧痕	硬	破片		
6	7	1C区 2a層	瓦	平瓦	(14.5)	(15.0)	2.0	凹面:灰 10Y4/1 凸面:灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	密 1mm 以下の白、凸面に3~5mmの白が混じる	凹面:布目痕、糸切り痕、ケズリ	凸面:縄タタキ、縄目痕、指頭圧痕、ハナレズナ付着、少しきらきらしている	硬	破片		
7	11	1C区 2a層	瓦	平瓦	(16.5)	(12.0)	1.9	凹面:灰 5Y4/1 凸面:灰 N4/0	灰赤 2.5YR4/2	密 1mm 以下の白、3mm 程度の白混じる	凹面:布目痕、糸切り痕	凸面:縄タタキ、縄目痕、指頭圧痕、ハナレズナ付着	硬	破片		
8	1	1D区 2b層	瓦	平瓦	(7.3)	(4.0)	1.7	凹面:灰 7.5Y5/1 凸面:灰 10Y6/1	灰白 7.5Y7/1	密 3mm 以下の黒色粒 1mm 以下の白	凹面:ケズリ、ヨコケズリ	凸面:縄タタキ、縄目痕	硬	破片		
9	2	1D区 2b層	瓦	平瓦	(8.6)	(5.8)	2.0	凹面:灰黄 2.5Y6/2 凸面:黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y6/1	密 3mm 以下の白、灰、黒色粒	凹面:ケズリ、布目痕	凸面:縄タタキ、縄目痕	硬	破片		
10	9	表土	瓦	平瓦	(12.5)	(9.1)	1.9	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	密 1mm 以下の白、濃灰	凹面:布目痕、刻印「理」あり	凸面:縄タタキ、縄目痕	硬	破片		
11	12	2D区 2d層	土脚器	皿(灯明皿)	口径:6.6	高さ:1.2	4.6	にぶい橙 7.5YR7/4	-	密 1mm 以下の灰、白、雲、2mm 程度の白混じる	ナデ	-	良	完形	ナデ、口縁部に煤の跡4箇所有り 底部に指オサエ	
12	10	1B区 2a層	瓦	軒丸瓦	-	直径:14.0	瓦当厚:1.7	灰 10Y4/1	灰白 5Y7/2	密 0.5mm 以下の白、濃灰細粒、瓦当面にキラキラした微細粒付着	瓦当面外縁ケズリ、側面ナデ、花卉に指オサエ、瓦当裏面に布ナデか	-	硬	瓦当面ほぼ完形	丸に精練	
13	4	2D区 2b層	瓦	平瓦	(7.2)	(6.3)	1.7	凹面:にぶい黄橙 10YR7/4 凸面:褐灰 10YR5/1	にぶい黄橙 10YR6/4	密 3mm 以下の黒色粒 2mm 以下の白	凹面:板ナデ	凸面:板ナデ	硬	破片		
14	15	1F区 2b層	瓦	平瓦	(10.5)	(7.0)	2.0	黒 N2/0	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm 以下の白、灰、2mm 程度の灰混じる	凹面:板ナデ	凸面:板ナデ	硬	破片	狭端面に「A」の中に「上」の刻印あり	
15	13	2B区 2b層	金属製品	つば金具	3.9	2.3	0.1	-	-	-	-	-	-	完形		
16	16	1C区 2a層	金属	銭貨	W(g):1.69 G(mm):22.95 N(mm):18.70 g(mm):7.70 n(mm):6.20 T(mm):1.10 (mm):0.76									-	1/1	
17	17	2B区 2b層	金属	銭貨	W(g):2.69 G(mm):25.40 N(mm):19.90 g(mm):7.75 n(mm):5.45 T(mm):1.45 (mm):0.88									-	1/1	

表4 出土瓦観察表(軒丸瓦)

種	報告番号	実測番号	直径	文様径	内区径	外区			外縁		瓦当厚	全長	丸瓦部			色調		硬度			
						内縁幅	珠文数	径	幅	高			内面	外面	狭端径	弁	幅		孤高	瓦当	断面
軒丸瓦	12	10	(14.0)	8.6	丸に結核	9.8	0.5	-	-	1.8	0.5	-	-	1.7	-	4.0	3.5	-	灰 10Y4/1	灰白 5Y7/2	硬

表5 出土瓦観察表(軒平瓦)

種	報告番号	実測番号	上弦幅	弦深	下弦幅	厚さ	内区		外区				脳区			文様の深さ	全長	平瓦部			色調		硬度		
							厚さ	文様	上外区	下内区	下外区	下外区	下外区	下外区	脳内縁幅			脳外縁幅	脳区幅	脳区文様	瓦当	断面		瓦当	断面
軒平瓦	1	5	-	-	-	(4.8)	(2.2)	均整唐草文	-	0.7	0.9	1.6	S2	1.1	0.9	2.0	S2	KK0.1.S0.2	-	-	-	-	黄灰 2.5Y5/1	灰黄 2.5Y7/2	硬

圖 版



1 調査区北半 (南西から)



2 SD101 検出状況 (南から)



3 調査区南半 (南東から)



4 P109 検出状況 (南西から)



1 P 106 ~ 108 検出状況 (西から)



2 P108・109 検出状況 (西から)



3 土層断面 4 検出状況 (東から)



4 土層断面 4 検出状況 (東から)



1 調査前風景 (北から)



2 調査前風景 (東から)



3 調査区南半 (南東から)



4 調査区北半 (南東から)



5 瓦溜まり SX09 検出状況 (東から)



6 瓦溜まり SX09 検出状況 (東から)



7 瓦溜まり SX09 東端掘削状況 (東から)



8 瓦溜まり SX09 東端掘削状況 (東から)



1



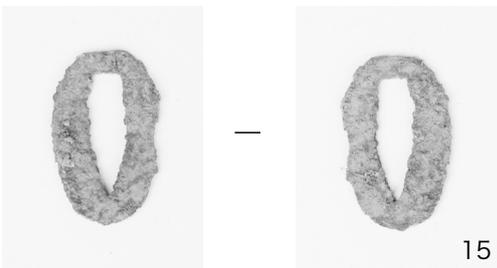
10



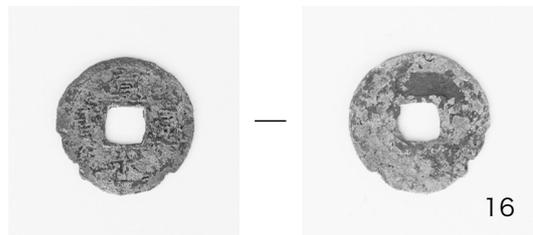
11



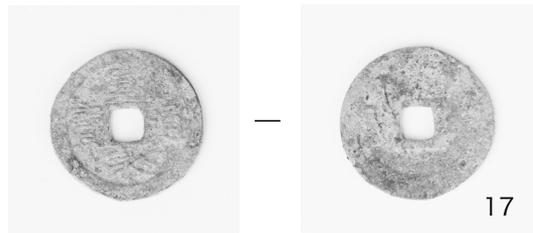
12



15



16



17

報告書抄録

ふりがな	おおやまざきちようまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ
書名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 71 集
編著者名	菅生 薫
編集機関	大山崎町教育委員会
所在地	〒 618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目 3 番地 電話 075-956-2101(代)
発行年月日	西暦 2025 (令和 7) 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 くぼかわいせき 久保川遺跡	おとくにぐんおおやまざきちよう 乙訓郡大山崎町 あざえんみょうじ 字円明寺 こあざさとのしろ 小字里ノ後 26-1、 26-6、27-1、28-1	26303	18 21	34° 54' 28"	135° 41' 11"	20231020	160 m ²	詳細分布
しろみさいいせき 白味才遺跡 (史跡大山崎瓦窯 跡北側隣接地)	おとくにぐんおおやまざきちよう 乙訓郡大山崎町 あざえんみょうじ 字円明寺 こあざしろみさい 小字白味才 39-3	26303	32	34° 53' 38"	135° 41' 11"	20240124 ~ 20240325	53 m ²	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ながおかきょうあと 長岡京跡 くぼかわいせき 久保川遺跡	都城 散布地	奈良～平安時代 中世	溝・土坑・ 柱穴	土師器・須恵器	中世の耕作溝を検出した。
しろみさいいせき 白味才遺跡 (史跡大山崎瓦窯 跡北側隣接地)	瓦窯 散布地	平安時代 中世～近世	瓦廃棄土 坑・土坑・ 溝	土師器・丸瓦・平瓦・窯体・ すり鉢・銭貨	既往の調査で検出した 瓦廃棄土坑の東延長部 分を検出した。

令和7年(2025)3月10日 印刷
令和7年(2025)3月31日 発行

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第71集

編集・発行 大山崎町教育委員会
〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目3
電話 075-956-2101(代表)

印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三
番町273
電話 075-467-5151
